

## 2019 年度事業概要

31 年続いた平成に別れを告げ、平和への願いが込められた新しい時代「令和」の幕開けは、その願いに反し災害と危機に見舞われた苦難の年となった。

9 月から 10 月にかけて発生した台風 15 号、19 号は東北・関東地方に甚大な被害を齎し、競輪界においても寛仁親王牌の開催 2 日目が順延する等影響を受けた。被害を受けた地域を支援するため、支部や会員を主体としたボランティアや義援金活動が行われ、なかでも選手の「足漕ぎ給油」がテレビで報じられ話題となった。また、12 月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症がパンデミック（世界的大流行）を引き起こし、感染者と死亡者が今も世界で増加を続けており、終息の兆しは全く見えていない。このパンデミックによって、今夏に開催する予定だった東京オリンピック・パラリンピックは 1 年の延期となった。競輪については政府からのスポーツ、イベント等の自粛要請を受け、お客様の安全を考慮し 2 月 27 日から当面の間は「無観客」で開催を行うことを決め、本場及び場外車券売場での車券発売・払戻は実施しないこととなった。

2 月末時点では積極的な活性化策の取り組み等によって車券売上は前年度対比で 4 % ほど上回っていたが、無観客実施後はグレード開催や F I 開催の売上が大幅に落ち込み、最終的には前年度対比 1 % 増の 660,460,555,100 円となった。新型コロナウイルス感染症は今後も長期に亘り日本経済や人々の生活に悪影響を及ぼすと見込まれ、競輪を取り巻く環境も更に厳しさが増していくものと思われる。このような状況下で賞金交渉が行われることとなったが、本会は選手の生活の基盤となる競輪開催の維持継続を第一に考え、2020 年度賞金は本年度と同様の賞金表を適用することで全輪協と合意に至った。

選手肖像権を活用した施策として、7 月にオフィシャルファンクラブを開設した。選手をより一層身近に感じてもらうための参加型イベントの実施や、無観客開催となったグレードレースに参加する選手コメントを動画で配信し、お客様に情報を提供した。

選手の出場については、月最低 2 回、最高 3 回の確保を念頭に置き、出場間隔や出場機会の均等が図られるよう関係者に対し強く要請した。また、日本競輪学校は 5 月から教育制度改革に伴い「日本競輪選手養成所」に名称が変更となったが、本会は教育課程において社会人としての規範意識の育成や競技規則に関する教育の充実が図られるよう意見を申し入れた。

選手指導については、先頭固定競走における競走の基本秩序を確保するため競技規則の一部改正が行われた。しかし、改正後において失格者が頻発したことから、会員に対し改めて競技規則を遵守するよう指導を行った。また、昨年度から本会独自で「落車防止キャンペーン」を展開しているが、本年度も引き続き落車・失格の撲滅を図るべく強化活動を推進した。

競技活動は、自転車競技の普及・啓もうに資する目的で第 66 回全日本プロ選手権自転車競技大会を松山競輪場で実施し、盛会裏に終了した。国際大会では、世界選で脇本選手が男子ケイリンで銀

メダルを獲得したほか、ワールドカップ等でも日本チームは世界の強豪をはねのけ多くのメダルを獲得し、競輪のイメージアップに大きく貢献した。

これら諸事業については、諸会議・各種研修会において説明し理解を求めるとともに、機関紙「プロサイクリスト」及び本支部間のネットワークを通じ、会員への周知啓もうに努めた。